

阪神大震災特集

地震と病院図書室

阪神大震災を体験した 図書室からの被災報告

中嶋和子

はじめに

あの悪夢のような大地震は多数の貴重な人命を奪い、計り知れぬばかりの大被害をもたらした。あれから3カ月余りが過ぎる現在も通勤途上の車窓からは、ブルーシートを掛けた屋根があちこちに点在し、全壊家屋や半壊家屋等の撤去作業が続けられている。復旧活動はめざましく、人々の底力が感じられる。

当院も被災地の中心にあり相当の被害を被ったが、災害時には医療最優先であることは言を待たないであろう。医療に関しては各専門分野からの報告がなされているので、ここでは病院図書室の被害状況を報告し記録にとどめておきたいと思う。

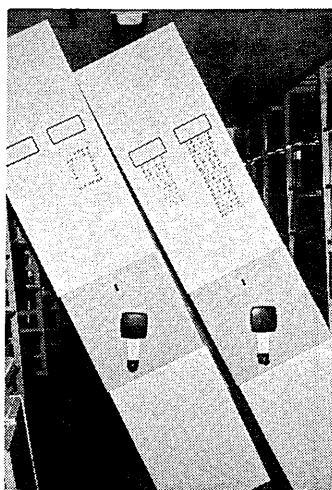
雑誌書架・書棚はすべて倒壊

まず図書室を一見して啞然としてしまったというのが本当のところである。入室しようにも足を踏み入れる余地がないほどに書架や書棚がすべて倒壊している。どこから整理に手をつけたらよいか見当もつかなかった。壁面の雑誌書架も部屋中央部に設置してあった書架も方向かまわずに倒壊している。雑誌書架は一月のことで約1年分のバックナンバーが入っており、相当な重量があるはずなのに倒壊は避けられなかった。想像もできぬ力が働いたのだろう。もちろん未製本雑誌は床に散乱し、平素は大切な資料として扱ってき

た雑誌も粗大ゴミに等しくみえたものだった。

倒壊した書架と散乱した室内

▼ (西宮市立中央病院玉井先生提供)



倒れた集密移動書架(脱輪している)

製本雑誌や単行本を配架してある移動書架は一部ではあるが、レールから外れてしまい、やはり倒壊は避けられなかった。書架後部の

なかじま かずこ：西宮市立中央病院図書室

補強用金具もアメのように曲がり、前面のハンドル側は一直線であるべきものがデコボコ状態に曲がってしまった。また、移動書架と壁面の間隔は30センチもあるだろうに書架の角があたった形跡が壁に残り、あの6段5連の書架が壁に当たるまで横揺れがあったことを思うと全く恐怖感は拭われない。二段重ねの書棚も中味ともども上段は落下し、ガラス戸はメチャメチャに破損した状態であった。横揺れ、上下動と想像もつかない自然現象であったことは事実のようだ。

コンピュータ・タイプライターは無傷であった

足を踏み入れる余地もないほどの書架倒壊の中であってコンピュータは危機一髪2~3センチの差で台からも落下せず無傷のままであったのは不思議としか言いようがなく神がかりとさえ思えたものだ。背の高い書架などと違い安定性があったのだろうか。それにしても周囲の倒壊書架にも当たらずに済んだことはラッキーであった。電源は外れており、コンピュータの中がどうなっているのか心配の種であったが、電源を入れ起動した瞬間はまさに万歳を叫びたい気持であった。外来のコンピュータは機能しなかったと聞いていただけにやはり胸をなで下ろす思いであった。

復旧はボランティアの方々とともに

この度ほど人々の援助の大きさ、有り難さを感じたことはなかった。一人の力で細々とどんなに頑張ってもこのように早く図書室の機能が回復することはなかったであろう。倒壊書架の間に入り、(いつまた余震が来るかもしれない不安感にビクビクしながら)床に散乱した図書を拾い出す作業から始めたものの、一人一人の力など本当に微々たるものだと痛感した。一日中作業をしてもどれほど捗ったかもわからぬほどの遅々たるものであったが、震災後3~4日後より学生、主婦、サラリーマン、ナースなどさまざまなボランティアの方たちが応援に駆けつけてくださった。そ

れまで黙々と一人で作業に専念していたが、これらのボランティアの方たちの若い力と明るさで一段と作業が捗ったことは言うまでもない。

人海戦術により図書、雑誌等の資料類を室外に運び出し、倒壊した書架を起こし修理しながらの作業であったが、見る見るうちに書架は被災前と同じ位置に並べられた。その後、室外に山のように積み重ねられた製本雑誌、単行本、未製本の雑誌を所定の書架に配架するにも人海戦術は効を奏し、実に大きな力となった。ただ、混乱した中で所定の書架に納本すべき指示も行き渡らず度々点検が必要であったことは致し方ないことであろう。移動書架も前面がデコボコになり、補助用金具もアメのように曲がって使用可能かどうか危ぶまれたが、早い時期に業者が入って全移動書架を解体し修理しながら組み立て直したことによって以前とほぼ変わらないまでに修復されたことは経済的にも大助かりであった。

(1/19-1/30) 相互貸借もOK

製本雑誌・未製本雑誌とも整理点検が終了し、相互利用にも供せられるようになった。単行本の方はまだ書架に納めたままの状態です未点検ではあるが、こちらは量的にも少ないので近日中には点検に取りかかりたいと思っている。(1/25現)

震災後は文献依頼の内容も以前と少し異なり、DOA (Death on Arrival) の死亡診断書について、救急医学や輸血関連の文献、Crush Syndromeなど災害医学関係文献の緊急依頼があった。ある図書室からはこのような文献をFAX送信により早々と送ってくださり感謝している。

今後の対策

地震対策としては、やはり書架の固定ということになるだろう。L字固定など上部と床をしっかりと固定していたものは損傷が比較的少なかったと報告されており、この点では

大学、公共図書館等の〈積層書架〉は損傷を免れた代表格だと思う。また、蔵書の落下は防ぎようもないと思うが書架先端のすべり止め、後部に少々傾斜させる等の配慮はいくらかでも被害を少なくするのに役立つのではないだろうか。移動書架などの集密書架は使用時は必ずロックし、使用後はできるだけ集合させておいた方が被害が少なくなると思われる。当院の場合も移動書架はロックもせず開架したままのものはレールからも外れ完全に倒壊していた。

|| おわりに

地震発生が夜も明けきらぬ早朝であったことが、全ての面で被害をいささかでもくい止めることになった。被害の状況を見るにつけラッシュ時であったり、勤務中や授業中であつたら被害は更に大きく計り知れないものになっていただろう。私たち図書室勤務者を例にとっても書架倒壊の下敷きになったり、蔵書落下のなかでどうなっていたか、人命に

被害がでることも想像されるだけに今回はまだしも幸いであつたと思う。

震災後、交通網の遮断や交通渋滞、電話回線の不通などによる困難な状況下にありながら、最初の土曜日には小田中事務局長が被災見舞いに駆けつけてくださった。帰宅した後でお会いすることができず残念であつたが、感謝感激であつた。その他の図書室や関係各方面からも心温まるお見舞い状やお電話をいただいた。この誌面をお借りしてお礼申し上げたいと思う。

当院は震災後より割合と交通事情がよく、（西宮北口駅までは早期より電車が通っていた）ボランティアの方々も駆けつけやすかつたようで、当院としてはこの点でも幸運であつた。それらの方たちにも心よりお礼申し上げたいと思う。また、病院にあつては水、ガス、電気（当院は直後停電したものの早期より回復）のライフラインの遮断はすべての面で大きな痛手を実感した中でよくがんばれたものだと思う。